令和三年度

宮崎県文化講座研究紀要

第四十八輯

宮崎県立図書館

序文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度に「宮崎県地方史講座」として開設し、平成十九年度からは地域の歴史のみならず、自然科学などにも範囲を広げた幅広い文化の発信と理解を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

これまで、宮崎県の歴史・民俗をはじめとした人文社会学・自然科学・文化・芸術など、様々な分野で研究、活躍され、県内社会に影響を与えていらっしゃる方々から講師を招聘し、講座を開講しております。令和三年度は、宮崎大学地域資源創成学部教授　根岸裕孝氏「文化とまちづくり」を開講しました。しかしながら、新型コロナウィルス感染拡大によって、八月に実施予定であった坂口潤成氏の「好きな場所で、好きなことをして生きていく」という講座が中止になりました。さらに、前年度のコロナ感染第三波で延期となり、今年一月に開講予定であった宮崎県立富島高等学校教諭　濵田登氏の「夢の甲子園～人づくり・心づくり・チームづくり～」は、今回こそは開講できるかと思っていたのですが、コロナ感染第六波により宮崎市が感染拡大急増圏域に入ったため、開講できませんでした。二年続いて残念なことになってしまい、感染症の脅威を改めて認識させられた次第です。この紀要が刊行されているころには、状況が好転していることを願うばかりです。

講座の内容は、講師の方々に文章にまとめていただき、「宮崎県文化講座研究紀要」（第三十三輯までの名称は「宮崎県地方史研究紀要」）として毎年発行し、宮崎の歴史・文化等に関する調査・研究に資することにも努めております。本年度は、講座を実施された根岸先生の原稿と、開講できませんでしたが、講座を実施する予定で事前に講演内容をまとめた原稿を寄稿いただいた、濵田先生の原稿を掲載いたします。

今後とも当館の研究紀要が、「ふるさと宮崎」の歴史や文化の研究の一助となり、県民の皆様の生涯学習の推進に役立つことができれば、大変幸せに存じます。さらに、コロナ後の社会づくりに寄与できればと考えています。

最後になりましたが、今回刊行される「宮崎県文化講座研究紀要」第四十八輯に御寄稿いただきました二名の先生方、講座開催にあたり御協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和四年三月

宮崎県立図書館長　**岩本　真一**

目次

一　根岸　裕孝　「文化とまちづくり」……1～10

二　濵田　　登　「夢を叶える生き方」・～心づくり、人づくり、チームづくり～……11～28

「文化とまちづくり」

宮崎大学
地域資源創成学部　教授
根岸　裕孝

目次

一　はじめに
二　学生参加のまちづくり
■現場から考えるまちづくり教育の実践
■子どもと社会力
■郊外化の進展と中心市街地の崩壊
三　まちなかと都市の創造性～創造都市と都市再生～
■ココロの豊かさと知識基盤型社会・創造都市
■創造都市と市民活動・協働
■みやざき国際ストリート音楽祭の意義～市民の共感と協働による都心部再生へ～
■芸術文化の拠点と創造性
■県立図書館の役割
四　おわりに

一．はじめに

全国の地方都市は、少子高齢化と若年層の人口流出により人口減少が加速化し、地方創生のもと各地で持続可能な地域づくりに向けた特色ある取り組みが進んでいる。こうしたなかで、文化振興とまちづくりはどのような関係があるのか筆者の視点から宮崎県立図書館にて講話を行った。私自身は、もともと産業立地政策や地域産業政策を専門としており、文化振興と市民活動についても全くの専門外であった。しかし、あることがきっかけで学生サークルまちづくり研究会の顧問として学生とともにまちなかに出て実践的な教育に取り掛かるきっかけを得た。

私のゼミではテキストに池上ほか編（二〇〇一）『文化政策入門文化の風が社会を変える』（丸善ライブラリー）を使用して、芸術・文化と地域・まちづくり・市民活動について学生と議論を始め、ボランティア活動も行った。また、当時、橘通に事務所を構えていたＮＰＯ法人みやざき子ども文化センターにてゼミを行い、後述のＮＰＯ法人宮崎文化本舗の皆さんをはじめＮＰＯ関係者の皆さんから文化と市民活動についていろいろなお話も伺った。今回の講話の内容は、この池上ほか編（二〇〇一）から学んだ内容とともに、文化振興に関わるＮＰＯの関係者や行政関係者の皆さんとの対話から生まれたものであるともいえる。また、本稿は、この講話を再録するイメージで編集したものであることをあらかじめ記しておきたい。

地域における文化・芸術振興は、脱工業化の時代である知識基盤型社会における新産業創出やまちづくりという点で非常に重要な要素であり、ヨーロッパの都市再生で注目される創造都市づくりの大きな柱でもある。地方創生の取り組みにおいて何か少しでも参考になれば幸いである。

二．学生参加のまちづくり

■現場から考えるまちづくり教育の実践

私が当時の通商産業省の外郭団体の研究員から宮崎大学教育文化学部の講師に着任したのは二〇〇一年四月である。着任当時に驚いたのが大学生の授業の出席率の高さとまじめさである。私が大学生になったのは一九八五年四月である。バブル経済の熱気も手伝って大学生は忙しくなる就職前に思いっきり遊ぶという風潮が当たり前の時代である。文系学部の場合、語学やゼミ以外は、授業に出なくても試験前さえなんとか勉強すれば単位が取れるので、大学生になったら自由な時間がたくさんあり、アルバイトや海外旅行、クルマで遊ぶなどがあたり前であった。まさに、その自由な時間を当時の学生たちはいろいろなことに使っていたし、世間的にも許容されていた。三〇年以上前のバブル全盛期の私の学生時代は、大学はレジャーランドとも揶揄されたが、そんな当時の雰囲気が消えていた。

私が特に気になったのは、学生の雰囲気である。まじめに授業に出席しているのだがなんとなく大人しく、漠然と公務員を目指すような感じであった。教育文化学部で教員免許を必修としない社会科学を学ぶ課程でありながら、どうも社会に対して特に関心が高いわけでもなく、夢や未来にむかってチャレンジして行動する雰囲気をあまり感じることができなかった。特に宮崎大学の場合、キャンパスが学園木花台に郊外移転した。他の大学のように学生街も学園木花台にはなく、学生は大学の周辺のアパートと大学を往復するのみである。地域と大学の関係も希薄であると感じた。こうしたなかで、大学生を「まち」に連れ出し、実践的な教育を行っている山口大学の事例を新聞で知り、私も何かできないかと思い始めた。ちょうど宮崎市の郊外に大型ショッピングモール進出の是非をめぐる議論があり、中心市街地の空洞化が懸念されていた。郊外型大型ショッピ

ングセンター進出によって中心市街地はどう変わるのか、現場で考えようと学生に呼びかけ、まちづくり研究会というサークルを立ち上げた。まちなかの未来を考えてまちの魅力を探そう、そしてまちなか再生に関わることに積極的に取り組むようになった。

■子どもと社会力

こうした学生とまちづくりに関心を持つうちに門脇（一九九九）の『子どもの社会力』（岩波書店）を読み進めるなかで、いま失われつつある子どもたちや学生の「社会力」を高める取り組みを大学の教育現場で進める必要があると確信した。社会力とは、「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくための必要な資質や能力である」（門脇、一九九九、六十一頁）。門脇は同書のなかで、近年の家庭環境や家族機能の変化、地域コミュニティ機能の喪失が子どもの他者への関心や共感の欠如をもたらしてきたと指摘する。そして、これは、子ども時代に大人や他世代との関わりの「体験」不足の深刻化が影響するとしている。

この子どもの社会力とその低下の背景の議論を踏まえてサークルの助言やゼミの指導を通じて大学生に中心市街地（まちなか）はどのように形成され、どのような社会経済的な意義や利害関係があり、そして空洞化懸念に対してどのように対応すべきなのかについて現場で直接ヒアリングや体験をして考える取り組みを始めた。まさに大学生版の社会力養成ゼミに取り組もうといろいろ実践的な取り組みを始めることとなった。

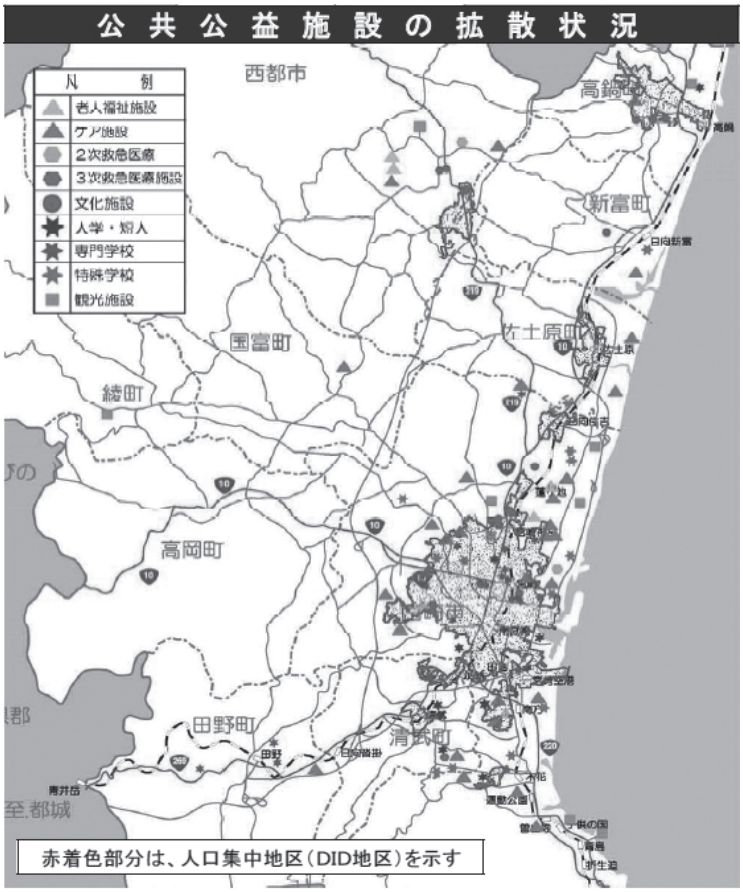


図２０（資料　H15.3 宮崎都市圏総合都市交通計画調査）

人口減少・超高齢化社会に対応した宮崎県まちづくり基本方針（2008）p.11

■郊外化の進展と中心市街地の崩壊

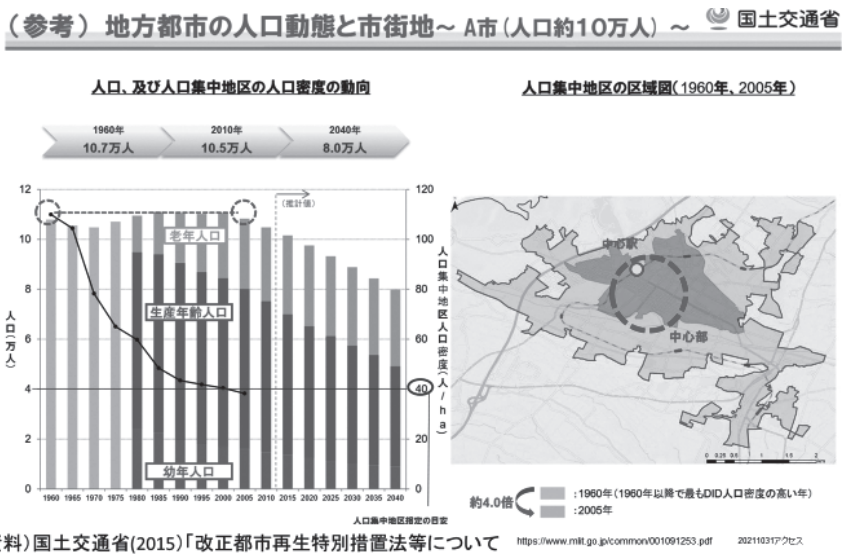
子どもの社会力の低下の背景に門脇は、地域コミュニティの喪失を挙げている。その原因の一つに郊外化があげられる。三浦（二〇〇四）の『ファスト風土化する日本―郊外化とその病理―』（洋泉社）は、地方都市における郊外化が固有の地域性を消滅させてバイパス沿いのロードサイドに全国均一の大型ショッピングセンター、コンビニ、ファミレス、カラオケボックス、パチンコ店が立ち並ぶ『ファスト風土』を作り出し、これにより昔からのコミュニティや中心市街地などの街並みが崩壊し、地域の経済社会や人々の人間関係や心も変容させたのではないかとの問題意識から書かれたものである。

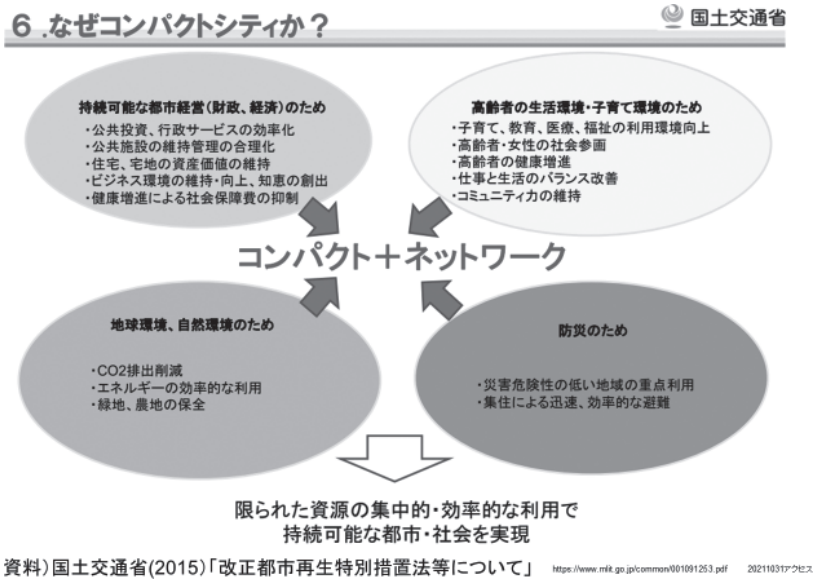
この郊外化は、わが国のモータリゼーションが関係しており、これに伴い住宅（居住）の郊外化のみならず、行政機関や文化関連、

学校・大学など公共施設・教育機関も中心市街地からの移転を促進してきた。宮崎市の学園木花台も宮崎大学の移転と郊外型の住宅開発が一体となったプロジェクトであり、これに伴い大学生がまちなかから郊外へ拠点を移した。

宮崎はクルマ社会といわれて久しいが、クルマなくして生活が成り立たないのも、こうした郊外化を促進できるだけの平野部があり、開発可能な土地があることも背景にある。

『人口減少・超高齢化社会に対応した宮崎県まちづくり基本方針』（二〇〇八）の資料に示されている宮崎市の公共公益施設を地図上に表した資料によれば、宮崎市の人口集中地区（DID地区）の周辺に公共公益施設が多数立地している。こうした公共施設の立地の郊外化は、クルマによる公共施設間の移動距離を長くすることにつながる。また、同様に同基本方針に示されている大規模小売店舗の郊外立地の状況をみると一九九〇年度の千㎡越の大型店は、まちなか七十九パーセントに対して郊外二十一パーセントであるが、二〇〇六年にはまちなか三十三パーセントに対して郊外六十七パーセントとなっている。さらに同指針の資料には、大規模な住宅団地の造成年と六十歳以上の住民割合（県内の千戸以上の宮崎市内の四団地抽出）の関係を示す図があり、造成年の古い団地ほど高齢化率は高くなっている。これは宮崎市内に高齢者比率の高い団地が増加していくことを示すものでもある。





こうした地方都市の郊外化と中心市街地の密度の低下は、人口減少に直面した地方都市にとって市街地拡大に伴う道路・水道等のインフラ維持費用の拡大とともに密度の低下に伴う未利用地の増大に対処する必要が生じる。宮崎市内でも中心市街地に路面駐車場が多くみられるのも郊外化に伴う密度低下を要因としており、県内の各都市も空き家やシャッター商店街の問題に悩むこととなる。

二〇一五年の国土交通省「改正都市再生特別措置法等について」の掲載資料には、人口十万人のある市を事例にした人口動向と人口集中地区の推移が示されている。一九六〇年度と一九八〇年度を比較すると約四倍に広がっている。そして一九六〇年に一〇・七万人の人口が二〇四〇年には八・〇万人に減少が想定されている。こうした市街地の拡大と密度低下はまちづくりに大きな影響をもたらす

のである。

こうしたなかで、国土交通省は、地方都市における多極ネットワーク型コンパクトシティを目指すことを示している。つまり、医療・福祉施設、商業施設や住居等がまとまって立地し、あるいは高齢者をはじめとする住民が自家用車に過度に頼ることなく公共交通により医療・福祉施設や商業施設等にアクセスできるなど、日常生活に必要なサービスが住まいなどに身近に存在することを目指している。

この取り組みは、宮崎市でも進められており、近年の宮崎駅周辺開発は、公共交通の利用促進を目指す取り組みと連動している。

なぜこれからの地方都市は、コンパクトシティを目指すかについて国土交通省は四つの点をあげている。

一つめが、持続可能な都市経営（財政・経済）のためである。まちなかに居住や公共・生活関連施設が集約することにより、公共投資、行政サービスの効率化、公共施設の維持管理の合理化、住宅・宅地の資産価値の維持、ビジネス環境の維持・向上、知恵の創出、健康増進による社会保障費の抑制があげられる。二つめが高齢者の生活環境・子育て環境のためである。クルマ社会を脱却し、地域コミュニティの再生を通じて子育て、教育、医療、福祉の利用環境向上、高齢者、女性の社会参画、高齢者の健康増進、仕事と生活のバランス改善、コミュニティ力の維持を目指すものである。三つめが、地球環境、自然環境のためであり、CO2排出削減、エネルギーの効率的な利用、緑地、農地の保全である。四つめが、防災のためである。防災危険性の低い地域の重点利用や集住による迅速、効率的な避難である。コンパクト＋ネットワークにより人口減少のなかで限られた資源の集中的・効率的な利用で持続可能な都市・社会を実現するものである。

郊外に大型ショッピングセンターの建設や郊外化によりまちなかの密度は低下しているが、そもそも中心市街地は住居や行政施設、事業所、教育・文化・福祉施設などもともと高密度である。密度が高いため多様な接触や様々な出会いがあり、その多様性がおもしろいので人が集まり、表現する。ストリートミュージシャンやストリートダンサーなども通りかかる観客があって成り立っており、山中に籠って聴衆のないところで演奏するミュージシャンはあまり考えられない。都市の持つ「多様性」「寛容性」「創造性」が都市の魅力である。

郊外の大型ショッピングセンターは一見すると「まち」に見えるが、こうした「多様性」「寛容性」は存在しない。ショッピングセンターでは、ストリートミュージシャンや政党による街頭演説はない。価値観が分かれるものを受け入れる寛容性というものが存在しない。

中心市街地は、まちの「顔」とも称される。その所以は、多くの都市ではまちなかで伝統的な祭りやイベントが開催され、その街並みや伝承される祭りには、まさに地域の遺伝子たるものを現在の人々は、引継ぎ発展させていくものであると思われる。

三．まちなかと都市の創造性～創造都市と都市再生～

■ココロの豊かさと知識基盤型社会・創造都市

一九八〇年代後半以降、ベルリンの壁崩壊による東西冷戦の終焉は、まさに世界的な大競争時代に突入し、製造業を強みとした日本経済も低賃金を強みとする中国・アジア諸国との競争のなかで国際競争力を低下させていった。また、社会経済自体も脱工業の時代つまり工業社会から知識を基盤とした社会経済への変化し、グローバル競争下における競争力の源泉も知識が価値の源泉となり、人々の持つ創造性が重要となる。

そうした知識基盤型社会の到来とともに人々の価値観も工業社

会の象徴であったモノからココロを重視した価値観へと変貌する。我が国の国民生活白書で今後の生活に何に重きを置くかをみると、一九八〇年ごろから「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を超えて重視されるようになっている。その心の豊かさとは何かについて池上ほか編（二〇〇一）では、ホンモノに対する欲求と記されている。そのホンモノとは、同書では、芸術・文化などの創造活動や固有価値の再発見・再評価と言っている。これを言い換えれば（他とは違う）自分たちのまちや（他とは違う）自分らしさを追求することにつながると解釈できる。

こうした市民の創造活動や表現、自分らしさ、誇りある自分たちのまちこそがココロの豊かさであるとすれば、生活の質やホンモノの豊かさの追求とは、文化政策を抜きに語ることができないこととなる。

ヨーロッパでは、都市再生の取り組みとして「創造都市（creative city）」の取り組みが行われ、わが国の都市再生にも影響を与えている。創造都市日本ネットワークのホームページ（https://ccn-j.net/creative-city/20211030 アクセス）には、創造都市について以下のような解説が行われている。まず、創造都市とは、グローバリゼーションと知識情報経済化が急速に進展した二十一世紀初頭にふさわしい都市のあり方の一つであり、文化芸術と産業経済との創造性に富んだ都市と紹介されている。さらに産業空洞化と地域の荒廃に悩む欧米の都市では一九八五年に始まる「欧州文化都市」事業など「芸術文化の創造性を活かした都市再生の試み」が成功を収めて以来、世界中で多数の都市において行政、芸術家や文化団体、企業、大学、住民などの連携のもとに進められていると記されている。

また、同ホームページでは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が文化の多様性の保持と世界各地の文化産業の潜在的可能性を都市間の戦略的連携により発揮させるための枠組みとして、二〇〇四年より「創造都市ネットワーク」事業を開始し、七つの分野で創造都市を認定、相互の交流を推進している旨を記載している。そしてわが国でも神戸市（デザイン）、名古屋市（デザイン）、金沢市（工芸）、札幌市（メディアアート）、鶴岡市（食文化）、浜松市（音楽）、篠山市（工芸）、山形市（映画）、旭川市（デザイン）の九都市が認定を受けており、他にも多くの都市が認定に向けて活動を行っていると記している。

同ホームページ上では、全国の取り組みが紹介されている。例えば山形市は、「二〇一七年に『ユネスコ創造都市ネットワーク』に日本で初となる映画部門で加盟認定されました。山形国際ドキュメンタリー映画祭の開催など、長年に渡り市民が映像文化に親しんできた背景があります。加えて山形交響楽団、山形美術館、東北芸術工科大学、伝統工芸、その他にも市民が活動を支えてきた多彩な文化とともに、創造都市の推進を図り、持続可能な都市の実現を目指しています」と紹介されており、映像文化や美術館・大学・伝統工芸・市民による創造都市やまがたづくりが展開されている。

さらに、同ホームページでは、大分市の事例も紹介している。大分市は、「こころ輝く 大分市 ー文化・芸術でつくる人とまちー」を基本理念としている。基本目標を、「はぐくむ」「ささえる」「つなぐ」の三つとしており、「おおいた夢色音楽プロジェクトの推進」、「アーティストバンクの設立・活用」、「文化・芸術×関連事業の創出」、「文化・芸術活動エールプロジェクト」の四つの重点プロジェクトを実施している。

■創造都市と市民活動・協働

こうした創造都市づくりは、まさに市民の主体的な芸術・文化活動への参画と市民間の協調・連携であり、市民活動自体が都市の活力にも影響をもたらすこととなる。こうした市民の協調・連携

等による社会組織に注目した概念がロバート・パットナム（Robert Putnam）による「ソーシャル・キャピタル」概念である。内閣府（二〇〇三）では、ソーシャル・キャピタルについて「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴であり、共通の目的に向かって協調行動を導くものとしている。また、内閣府（二〇〇三）は、このソーシャル・キャピタルについてわが国の日本の都道府県についての概観としてボランティア活動の活発な地域は、犯罪発生率が概して低く、失業率も同様であり、出生率は高い傾向にあると記している。

こうした市民のボランティア活動に象徴される社会的な繋がり（ネットワーク）とそこから生まれる規範・信頼は、近年の公益のために自発的・自律的に活動するボランティア・市民活動の活発化の持つ意味を示していると思われる。

市民活動の活発化と文化・芸術活動において県内で注目されるＮＰＯ法人として宮崎文化本舗があげられる。宮崎文化本舗の設立の経緯は、宮崎映画祭である。携帯電話が普及していない時代には、こうした映画祭など市民主体の活動においては、チケット等の問い合わせなどの対応が日中ほとんどできない状況にあった。そうしたなかで映画祭を契機に市民活動の中間支援の取り組みを行ったことを契機に文化を軸としたネットワークを活かした活動を宮崎文化本舗は行っている。自ら小規模ながら映画館を運営するとともに、みやざきストリート音楽祭の事務局をはじめ、みやざきアートセンター、宮崎市市民活動センター等の指定管理者として業務を担っている。こうした指定管理業務に際しては、文化・芸術に関する幅広いネットワークが活用され、文化・芸術関連の著名な関係者、市民活動の関係者などと連携し、全国の動向がいち早くもたらされるとともに、全国的にも最先端の取り組みも行われる。コロナ禍において新たに移設された宮崎キネマ館は、移転費用の一部をクラウドファンディングによって市民からの応援も寄せられるなど文化による中心市街地再生の事例として大変注目される取り組みである。また、みやざきアートセンターも特色ある企画展が行われており、中心市街地の活性化に寄与している。

■みやざき国際ストリート音楽祭の意義
～市民の共感と協働による都心部再生へ～

また、みやざき国際ストリート音楽祭の開催は、文化芸術と中心市街地の活性化を考える契機となったといえる。二〇〇六年五月三十一日付の宮崎日日新聞の「私論公論」にこの第１回のみやざき国際ストリート音楽祭の意義について寄稿した。内容は、中心市街地と芸術文化活動の意義について論じたものであるが、以下はその概要等について改めてここでご紹介させていただきたい。

二〇〇六年に開催された第一回のみやざき国際ストリート音楽祭は、まさに国際にふさわしいプログラムとともに市民が協働して作り上げた音楽祭として宮崎市の中心市街地再生にむけた画期的な取り組みである。世界的に著名なシャルル・デュトワ氏によるバレエ音楽「兵士の物語」はテレビ生中継で放映されるとともに、県外からの観客が駆け付け、ホンモノの芸術に市民が直接触れる機会となった。経済社会の成熟化のなかで、豊かさに対する価値がモノからココロへシフトつまり精神的な豊かさを求める時代となり、生活の質とはまさに人間の内的な精神性に依拠するとともに、芸術文化に触れることは人々の精神的な充足性を満たすことであり、生活価値を高めることにもつながる。

また、芸術活動は、外部効果つまり創造活動に関わる人々以外にも誇りをもたらし、その文化資産が継承されれば地域の固有価値の形成につながる。

音楽祭の開催について橘通を中心としたストリートで実施する意

義とは何かといえば、ドイツの哲学者・社会学者であるハーバーマスをはじめとする公共圏の議論が参考になる。そもそも芸術活動は、封建期において西欧の宮廷において貴族が独占し、市民にとって閉ざされたものであった。しかし、近代社会への移行期においては、その文化的機能の「場」は都市（まちなか）移行した。その背景には、都市の持つ多様なそして寛容な人間・社会の関係性が階級や立場を超えた芸術批評を創り出し、それは市民の「公論」形成へと発展して市民社会の基盤となった。芸術文化において立場を超えた交流や批評というのは、わが国でも封建時代において和歌や茶の湯などは身分を超えた交流が行われていたとされる点も興味深い。

近年の映像・音響などの複製技術の発達は、市民を芸術に近づけることを可能としたが、芸術が持つ自律性の追求が専門家の芸術と一般市民の芸術を乖離させてしまう可能性ももっている。デュトワ氏が指摘していたが、都心部の広場や通りを舞台にした音楽祭は、ヨーロッパの都市において一般的に行われている。その意義は、ハーバーマス公共圏の議論のように市民が気軽に公共空間としての広場に立ち寄り、人間の精神活動を満たす芸術活動に触れながら、行われるコミュニケーションが都市の豊かさと市民社会の基盤を創り出すことになる。

みやざき国際ストリート音楽祭は、約四〇〇人のボランティアが参加し多数の企業からの寄付金が寄せられた。人々の多くの共感を持つ質の高い芸術創造活動は、市民の自発性による参画と立場を超えた市民の協働を促すことができる。また、橘通という場所が、単なる商店街や車道としての意味ではなく、市民のための公共空間として不可欠であり、中心市街地は都市の顔であると例えられる意義とそれがもたらす豊かさをとらえ直す契機となる。

中心市街地におけるこうした芸術活動の活性化は、先述の都市の創造性と関わる。グローバル化した社会経済のもとでの知識や創造性の源泉ともなる。ヨーロッパの都市再生もこうした芸術文化がもたらす創造力が情報通信・デザイン・文化などの知識・感性産業の都市集積と芸術と産業の相互の関係性が雇用創出と新産業創出をもたらし、都心部の公共性の復権を通じて多様な関係性をベースとした豊かさを創り出している。

■芸術文化の拠点と創造性

こうした点からみると、芸術・文化の創造活動は、知識基盤型経済社会において市民をつなぎ創造性豊かな地方都市づくりにおいて重要な役割を担っている。美術館、博物館、図書館がこうした知識基盤型経済社会の自発性と創造性を兼ね備えた市民の知の拠点や関係性の構築として重要な役割を担うことは間違いないところである。

こうした都市の創造性に注目したリチャード・フロリダ著（井口典夫訳）（二〇〇八）『クリエイティブ資本論』をはじめとする著作はまさにグローバル経済のもとでの都市再生の方向性を示すものである。

■県立図書館の役割

最後に、図書館の役割について非常に有益な論文として元鳥取県知事で総務大臣を務めた片山善博氏の論文の内容を紹介したい。

片山（二〇〇七）では、図書館本来の機能、つまりミッションは、民主主義社会の国民・住民の「自立支援」を「知的インフラ」という側面で支えることと指摘している。そして、その知的インフラを支えるのは、真の民主主義社会の実現には、政府と国民との間でできるだけ広範な情報共有が必要であると同時に、政府が発信する情報だけでなく、いわば「対抗軸」ともいうべき客観的資料や政府案への問題点を論じた資料など、バランスの取れた情報環境が必要で

あると述べている。

これらの指摘を踏まえると地域の自律や創造力が問われるなかでその自治力をどう高めるか、地方分権とは自己決定・自己責任であり、その判断と執行に不可欠な情報環境の場として県立図書館は重要な役割を担っているといえる。

四．おわりに

今回の講話を通じてグローバル化に伴う都市再生の潮流として創造都市を取り上げ、都市の持つ豊かさや芸術文化の振興と市民活動そして新産業創出についての関係性について論じた。経済社会の成熟化に伴い、こうした創造都市づくりが市民のシビックプライドの向上と新産業創出につながり個性のある地方都市づくりにつながると思われる。その中心に、美術館・博物館・図書館など芸術・文化施設の運営やそれにかかわる人的なネットワークの力をどのように強化していくかが問われる。そうした点からも県立のこれら3施設を中心とした芸術・文化の拠点とまちづくりをどのようにつなげていくのか関係者の協働が期待される。

【参考文献】

池上惇・端信行・福原義春・堀田力編（二〇〇一）『文化政策入門　文化の風が社会を変える』丸善ライブラリー。
片山善博（二〇〇七）『情報の科学と技術』五十七巻四号，一六八～一七三頁。
門脇厚司（一九九九）『子どもの社会力』岩波新書。
国土交通省（二〇一五）『改正都市再生特別措置法等について』(https://www.mlit.go.jp/common/001091253.pdf 20220226 アクセス)
内閣府（二〇〇三）『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』(https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital 20211121 アクセス)。
三浦展（二〇〇四）『ファスト風土化する日本　郊外化とその病理』洋泉社。
リチャード・フロリダ著　井口典夫訳（二〇〇八）『クリエイティブ資本論―新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社。

「夢を叶える生き方」

～心づくり、人づくり、チームづくり～

宮崎県立富島高等学校野球部

監督　濵田　登

目次

一　Introduction
① はじめに
② 自己紹介
③ 野球との出会い
④ 迂をもって直となす
⑤ 教師として、指導者として
⑥ 野球の素晴らしさ
⑦ キャッチボール

二　心づくり
① きっかけ
② これまでの自分
③ 心がけていること
④ 口癖が性格をつくる
⑤ 魔法の言葉
⑥ 予祝
⑦ 自分自身を奮い立たせる
⑧ プラスの言葉、マイナスの言葉
⑨ 可能性
⑩ 心を磨くことの大切さ
⑪ 心の置き所
⑫ 心ここに在らざれば
⑬ 「失敗」と書いて「成長」と読む
⑭ 下りのエスカレータ
⑮ 限界
⑯ 在り方
⑰ 人生のテーマ

三　人づくり
① 人生には不変の原理が二つある
② 凧
③ 微差は大差
④ 小事が大事を生む
⑤ 伸びる選手
⑥ 成功の方程式
⑦ 何とどう向き合うか
⑧ これから求められる力
⑨ 人は「変われる」

四　チームづくり
① TEAM
② 牽引する者に求められる目
③ 不易流行
④ 貞観政要
⑤ 求心性と遠心性
⑥ サラリーマン
⑦ 叱るコツ
⑧ 啐啄同機
⑨ キョウイク
⑩ ダメにする言葉

五　最後に
① 道を究める
② Simple is Best
③ 明日やろうは「バカ野郎」
④ 継続は力なり
⑤ 成長

Ⅰ　Introduction

①　はじめに

点と点、相連ねて線と成す
線と線、相並べて面と成す
面と面、相重ねて体（てい）と成す

私が、チーム作りで心がけていることです。点は個を表し、線は個同士の繋がりを表し、体はチームを表すことだと解釈しています。これまでの経験や、私自身が大切にしていること、今現在、考えていることを伝えたいと思います。

②　自己紹介

宮崎県宮崎市田野町の出身です。田野小学校、田野中学校、宮崎商業高校、九州国際大学と勉学に励み、大学卒業後、空港前にある株式会社デンサンに四年間勤務しました。その後、県の教職員として採用され、初任校が都農高校でした。都農高校で九年、宮崎商業高校で十年、富島高校が九年目で現在に至っております。

③　野球との出会い

私が、小学三年生の時に田野小学校に少年野球チームが発足しました。チーム名を決める際に、いろんな案が出ましたが、私が発案した「わにつかジャイアンツ（現鰐塚ジャイアンツ）」に決まりました。

中学・高校時代は、主将を務めました。おかげでいろんな経験を積むことができました。チームをまとめることの難しさや練習の段取力、気配りや気付く力等いろいろと勉強になりました。

高校最後の夏は、準々決勝で延岡工業高校に逆転負けを喫しました。最終回を迎え、まだ一点差でした。最後の力を振り絞って腹の底から精一杯の声を出してチームを鼓舞しないといけない場面です。しかし、主将だったのに、半ば諦めていました。最後の最後でやりきれなかったことを今でも後悔しています。

大学では、二年生でベンチ入りしましたが、自ら指導者の道を選び、学生コーチとして勉強し、大学四年生の時は、明治神宮大会に出場しベスト４に入ることができました。

④　迂をもって直となす

大学を受験する際には、日本体育大学を受験しました。ずっと憧れていた体育の先生になりたいという思いで挑戦しましたが、不合格でした。しかし、諦めたくなくて恩師に相談し、それなら商業科の教師になろうと考え、経済学部のある大学に行くことにしました。

私は高校球児の時に何が何でも甲子園に行きたいと思って、日々の厳しい練習にも耐え頑張ってきました。その時から高校野球の指導者になりたいと考えていました。母校の監督として甲子園に行きたいと夢が膨らんでいきました。

「迂をもって直となす」という言葉があります。遠回りをしたように思いますが、今振り返ると曲がりくねった道を突き進んだ結果、近道だったように思います。体育の教師になっていたら、野球観も今と違っていたかもしれません。普通科や工業高校、農業高校等に行く可能性もあるので、母校で監督できなかったかもしれません。商業科の教師になったからこそ、母校である宮崎商業高校に帰れたのかもしれません。

⑤　教師として、指導者として

初任校である都農高校では、部長からスタートし、監督を２年しましたが、その後、同和教育研究員をしました。勤務の形態は他の

教員と一緒で通常通り出勤し授業もします。ただし、担任は持てません。部の顧問も主導ではできないので、サブで携わることになります。

同和教育研究員とは、各地区にある小中高に一人ずつ配置されており、その地区の職員研修で声がかかると講話をしたり、全国各地の研究大会等に参加し研鑽を積み、それを地域に還元するという役割を担っていました。在任中は、人権教育の研究指定を受け研究主任をしました。全国各地を周り差別の現実に接する機会があり、教師として、指導者として、一人の生徒と真摯に向き合うことの大切さに気付かされました。

その後、都農高校を離れ、母校である宮崎商業高校に赴任しました。野球の指導者としては、宮崎商業高校で、九州大会三回、甲子園に夏一回出場しました。現在勤務している富島高校では、九州大会五回、甲子園はセンバツ一回、夏一回出場しました。九州大会、甲子園に出場はしていますが、それ以上に負けているということです。私の野球人生を振り返ると、勝った時の記憶よりも負けた時の悔しさや記憶の方が鮮明に残っています。その負けた時の悔しさが、日々のモチベーションになっているということは言うまでもありません。

⑥ 野球の素晴らしさ

野球とは、人生そのものだと思っています。ルールは複雑で、ルールブックとして本になるほど、色々と決まり事があります。また、野球用語には、「死」や「盗」、「殺」に「邪」「犠」「暴」といったものがあります。戦時中、英語を使ってはいけない事情等もあり、その当時の名残もあるみたいですが、人生で起こりうるいろんな要素が含まれていると思っています。もう十年以上前になりますが、こういう一節を読んだことがあります。ちょっと出所は覚えていませんが、

野球というスポーツは人生そのものである。
プレーとプレーの「間」に様々な可能性がある。
いろんな「勝負」がある。
チーム対チーム、バッター対キャッチャー、バッター対ピッチャー、キャッチャー対ランナー、監督対監督などがある。
野球は「平等」である。
上手い選手も下手な選手も等しく打順が回り、守備につく。
弱いチームも強いチームも攻守交代する。
他のスポーツはボールそのものが点になるが、
野球は「人間」がホームに帰らないと点にならない。
野球にパス回しなど時間稼ぎはない。
最後まで何があるか分からない。
大逆転で勝つこともあれば土壇場で負けることもある。

だから野球は人生そのものである。

⑦ キャッチボール

誰もが一度は経験したことのあるキャッチボールです。最近、公園や路上で、キャッチボールをしている姿を見なくなりました。危ないからでしょうか？場所がないからでしょうか？それとも時間が無いからでしょうか？野球に携わる者として寂しい気持ちになります。キャッチボールは、コミュニケーションを学ぶための便利なツールなので、いろんな所でキャッチボールを復活させたいと思っています。佐藤倫朗さんの書かれた「いつもキャッチボールが教えてくれた」には、こんなふうに書かれています。

思い出していただきたいのだが、キャッチボールはコミュニケーションそのものである。父と子の、兄弟の、友人同士のコミュニケーション、言葉のいらない不思議な会話である。

人と人とのコミュニケーションだから、キャッチボールには社会性の基本のようなものも当然含まれている。ボールは相手が捕りやすいようにと、胸元に投げ込む。これは「思いやり」であろう。暴投したら「ゴメン！」という。これは「マナー」であろう。相手が暴投しても黙ってボールを拾いに走る。これは「ルール」であろう。いい球がきたら思わず「いい球！」といいたくなる。これは相手を「評価」し「尊重」するということだろう。相手の技量や性格を推し量ることができる。これは相対的な「自分認識」だろう。ボールが当たれば当然痛い。「これは「危険認識」ということだろう。

ここに書かれた内容は、まさに言い得て妙だと思います。

私は、物心ついたときから自営業で忙しい父に時間さえあればキャッチボールをねだっていました。肩慣らしが終わったら、すぐにピッチングです。いつも私がピッチャーで父がキャッチャーです。地面にベースを書いてストライク、ボールの判定。フルカウントになると、急に、ツーアウト満塁になって最終回。緊迫の場面をつくって、サインを確認して、モーションに入り投球する。ストライク、ボールの判定で一喜一憂していました。

もうすでに亡くなった父に伝えたい。キャッチボールをしてくれてありがとう。

（画像：著者提供　一部加工）

二　心づくり

①　きっかけ

自分自身のこれまでの人生を振り返ると、自分が変わるきっかけがありました。それは人との出会いです。

中学生だった時に体育の先生に憧れ、高校生の時は野球部の監督の先生に憧れ、会社に勤めていた頃は、上司やお客さん、いろんな人たちとの出会いがありました。初任校の都農高校では、人権教育に携わるきっかけをいただきました。宮崎商業高校在任中は、その時の校長先生に「致知」という人間学を学ぶ雑誌を教えていただき、いろいろと導いていただきました。

現在は富島高校で巡り会ったコーチとともに、二人三脚で富島高校野球部を作っています。いろんな方たちとの出会いが今の自分を作っていただいたと思っています。その時その時で人に恵まれているとつくづく思います。

②　これまでの自分

いつも思うことは、今日という一日をなんとなく過ごしたくないと思っています。たった一度きりの人生ですから、何か生きてきた証を残したいと考えています。誰にでも言えることですが、今日という一日を積み重ねた結果が、今の自分だと思います。これまでの自分は変えられませんが、これからの自分は、今この瞬間から変えることができると思います。その日の目標がその日を支配します。一日をどう生きるか？今、ワクワクしているか？そのように考えることで、一日一日が充実していくのではないかと思います。

③　心がけていること

言葉の大切さを意識しています。それから、目に見えない応援団を信じています。それは、自分の言動、行動全てが、自分に返ってくると思っているからです。

また、自分の身に起こったことに偶然は無いと思っています。その事象が実際に起こっているわけですから、必然だったということだと思います。常に想定内とし、何があってもブレないようにしたいと、そのように心がけるようにしています。

④　口癖が性格をつくる

どこかで、「口癖が性格をつくる」と聞いたことがあります。何かの標語だったのか、本だったのかは定かではありませんが、まさにそうだと思います。頭の中の思考がそのまま口から言葉が発せられているはずです。ですから、言葉遣いや口癖は、その人の性格をそのまま表すバロメーターになっていると思います。ということは、自分の性格をよくしようと思えば、汚い言葉や蔑む言葉などを使った時、自分自身が気づくことができれば、少しずつ改善できると思います。

⑤　魔法の言葉

五日市剛さんの「ツキを呼ぶ魔法の言葉」をご存じでしょうか。講演記録を起こした冊子があります。その内容は、五日市さん自身がイスラエルを旅した時に、あるおばあさんとの出会いで、自分の人生が変わったという話です。そのおばあさんに教えてもらったのが魔法の言葉です。「ありがとう」「ツイてる」「感謝します」という三つになります。自分に良くないこと(難)が有るから、「有難う」。何か良いことがあったら「ツイてる！」。こうなったらいいということを想像しながら「感謝します」と口にします。まだ起こっていない未来のことでも「明日、晴れました！晴れさせて頂き、感謝します」とか、「甲子園に〇〇のおかげで行けました！感謝します！」

とイメージしながら言い切ると本当にそうなってしまいます。思うだけではダメです。声に出すことが大事です。

⑥　予祝

私が富島高校に赴任したときは、部員は五人しかいませんでした。職員の歓迎会で「三年で九州大会、四年で甲子園に出場します！」と高らかに宣言しました。その瞬間、会場では失笑を買いました。確かに部員は五人しかいないので笑われて当然です。私は「そうですよね」と笑って返しましたが、腹の中では「絶対、甲子園に行ってみせる」と誓い、それをモチベーションにしました。

実際、それくらいのスピード感でやらないとチームは強くなりません。いつかそのうちにと思っていたら、目標を達成できないと思っていました。夢に期限を決めるとそれが目標になると言われたことがあります。大きい目標を達成するために、逆算し、小さな目標を定め、一点集中でクリアしていきました。

もう一つ大切にしたことが予祝です。春、桜の木の下で花見をするのは、日本古来の考え方で、秋の五穀豊穣を願って前祝いをすることで、願いを叶えるそうです。これを予祝といいます。実際に、三年で九州大会出場できました。それから四年と宣言しましたが、一年遅れで甲子園出場の夢も果たすことができました。周りからは奇跡などと言われましたが、言葉の力を実感しました。

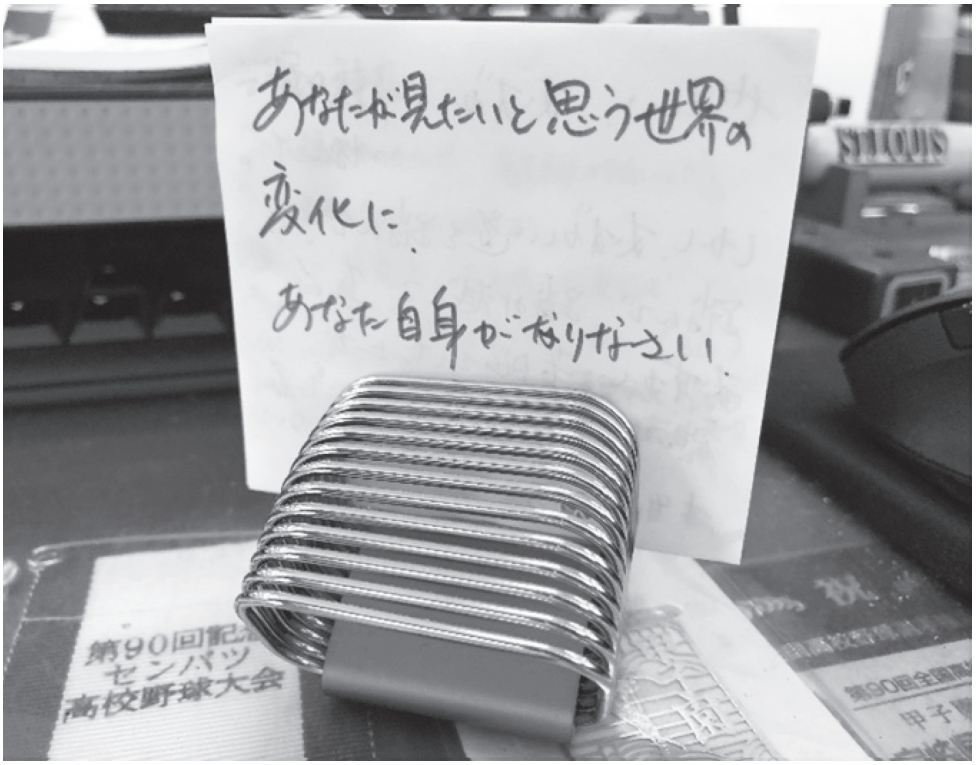
⑦　自分自身を奮い立たせる

私は富島高校に赴任した際に、ある言葉をメモに書いて、毎日読み聞かせてその日をスタートするようにしています。九年経った今でもです。ちょうど赴任してすぐの最高のタイミングでこの言葉に出会いました。それは、

「あなたが見たいと思う世界の変化に、あなた自身がなりなさい」

というマハトマ・ガンジーの言葉です。

私は、一生に一度、甲子園に行ければいいと思っていました。しかし、一度行ってみると、二度目を味わいたいと思いました。私自身は、甲子園を一度経験できたから別にいいのですが、とにかく教え子を連れて行きたい。鍛えた選手たちに甲子園の感動を味合わせたいと思うようになりました。その気持ちがガンジーの言葉とマッチしました。



（画像：著者提供　一部加工）

⑧ プラスの言葉、マイナスの言葉

夢が叶うの「叶」という字は、「口」に「＋（プラス）」と書きます。夢を叶えるためにはプラスの言葉を口にしないといけません。また、汚い言葉を口にすることを「毒を吐く」と言います。「吐」という字は、せっかく「＋」の言葉を口にして夢を「叶」えようとしても「－（マイナス）」を口にすると「吐」という字になってしまいます。そうなると悪い事に悪いことが重なり負のスパイラルに陥ってしまいます。

⑨ 可能性

誰にでも可能性はあります。しかし、諦めてしまったら可能性はゼロになってしまいます。愚直でもいいから、ずっとやり続ければできるようになります。今まで、自ら切り拓いてきた選手をたくさん見てきました。だから、選手たちにはコツコツ努力することの大切さを説いています。不可能の英単語は、impossible です。オードリー・ヘップバーンが次のような名言を残しています。

> Nothing is impossible, the word itself says “I’m possible!”
>
> これを日本語にすると・・・
>
> 不可能（impossible）なことはない。不可能という言葉自体「私は可能（I’m possible）」と言っている。

これを初めて見たとき、なるほどと思いました。

⑩ 心を磨くことの大切さ

自分を高めるには毎日欠かさず心を磨かなければならないと思います。一日一日を大切に生きることが悔いを残さない生き方になると思います。時には辛いことや苦しいことはあると思います。そんな試練の時に、自分を磨く絶好の機会として捉えることができるかが大事だと思います。長く生きれば生きるほど、苦楽や幸不幸があり、そんな日々を磨き砂だと思い、自分を奮い立たせて鼓舞する。それを繰り返すことで生き抜く力が身についていくと思います。

玉、琢かざれば器を成さず
人、学ばざれば道を知らず
（玉も磨かなければ立派な器にはならない。人も学ばなければ立派な道を知ることはできない）

人間の心というものは、さほどきれいなものではないのかもしれません。ある意味自然に似ているのかもしれません。雑草は放っておくと、瞬く間に生い茂っていきます。美しい花を咲かそうと思えば、水を与え、肥料をやり、虫を駆除し、丹精込めて育てなければなりません。人の心も、それと同じだと思います。放っておくと雑草が生えてきます。心の花を咲かせるためには、雑草が小さなうちに丁寧に抜いてあげることです。

⑪ 心の置き所

いかなる状況に陥っても、いかなる事態に出遭っても、常に心をプラスに転じるように心がけることが肝要だと思います。

松下幸之助さんはこう言っています。

「人間は若い時の心がけによって、ずいぶんと差が出るものだ」

稲盛和夫さんはこう言っています。

「仕事を好きになったこと、会社を好きになったこと、そのことによって今日の私がある」

二人のこの言葉から、心の持ちようが自分の人生に影響を与えるということに気づかされます。やはり日本を代表するようなトップの方々の考えは一致するものです。

世の中、いろんな考えや価値観を持った人がいますが、成功する人とそうでない人の差はどこからくるのでしょうか。私は、心の置き所だと思います。一つの出来事をありがたい教えだと受け止める人もいれば、全く逆に考える人もいます。艱難にあった時、豊かな実りにする人もいれば、不平不満の種にしてしまう人もいます。すべては、その人の心の置き所だと思います。

⑫ 心ここに在らざれば

心構えというのは、どんなに磨いても毎日ゼロになるものです。毎朝歯を磨くように、心構えも毎朝磨き直さなければならないものです。心とは、その日によって大きさが変わります。身長が翌日に二十センチ伸びません。体重が翌日に二十キロ減ることもありません。しかし、心は二倍にも三倍にもなったりします。

こころがまえ・・・とは、「心が前」ともいいます。まずは心がここになければ、何も沁みこんでいかないということです。心身を鍛えるには、まずは心が前に来て、その後に行動が伴わなければなりません。

心ここに在らざれば、
視れども見えず、聴けども聞こえず、
食らえども、その味知らず

⑬ 「失敗」と書いて「成長」と読む

失敗をすればするほど、それは自分のデータとして蓄積されると思います。失敗をすれば、どうして失敗したのか、何がいけなかったのかを考えるようになります。頭を使って、工夫して、ああでもないこうでもないと知恵を振り絞るようになります。その試行錯誤があるから、人は成長するのだと思います。一番良くないのは、失敗を恐れてチャレンジしなくなることです。そこに成長はありません。その次に良くないのは、失敗を受け入れず真正面から向き合わないことです。そこにも成長はありません。

⑭ 下りのエスカレータ

人生は下りのエスカレータと一緒です。エスカレータのスピードは時代のスピードです。立ち止まっていては段々下に降りていってしまいます。かといって、エスカレータと同じスピードで歩いていても現状維持のままです。目まぐるしい時代のスピードが速くなっているので、その速さ以上のスピードで駆け上がらなくてはならないと思っています。

⑮ 限界

限界を作っているのは、実は自分の意思が作っているのです。その意識レベルを上げてあげれば限界値は上がるものなのです。人間は誰しも、苦しみや辛さ、面倒くささからついつい逃げたがるものです。限界を超えないと新しい限界になりません。

⑯ 在り方

自分がよりよい人生を生き抜くために、どのような存在でいたいのか、それが人としての在り方だと思います。簡単に言えば、自分の軸を作り、ブレない自分をどのように作っていくのか、というこ

とになると思います。

人には二つの種類に分けられると思います。一つは、「自分の人生に誇りを持って生きています」と言える人たちです。もう一つは、「自分らしく生きていない。私らしくないから満足できていない」と言う人たちです。この差はどこから来るのでしょうか。

私は一日一日をどう生きるかで違ってくると思います。もちろん、こうだという答えはないと思います。人によって価値観も違えば環境も違います。それぞれの立場もあれば、性格も違います。自分らしさを追い求めるには、自分の中に「これでいいのか？」という尺度を持って生きることが大事だと思います。そうすれば、徐々に軸というものが自分の中にできてくると思います。軸ができてくれば、人を許せたり、人に優しく接することができるようになると思います。若い頃はイライラしていたのが、歳を取ると丸くなるということも、軸ができるということかもしれません。

⑰　人生のテーマ

人生は一度きりです。途中でリセットすることはできません。明日、確実に生きていると保証されている人はこの世に誰一人としていません。事故や事件、災害で亡くなった方々は、五年後の自分、十年後の自分、未来の自分を想像していたはずです。家族や恋人、夢を追いかけていた人、仲間や友人たちとこれからも楽しい人生を思い描いていた人、いろんな人がいたはずです。

今の私たちにできることは、今を精一杯生きるということだけです。そこで、自分の命題、テーマを持って生きることが大事になってくると思います。

ここで問います。あなたの「人生のテーマ」は何ですか？私の人生のテーマは、「人を育てる」です。一教師として、一監督として、自分の持っている知識や経験を通して「人を育てる」という使命感を持って日々接するようにしています。少しずつではありますが育ってくれていると思います。

（画像：著者提供　一部加工）

三　人づくり

①　人生には不変の原理が二つある

一つは投げたものしか返ってこないということです。もう一つは、人生は何をキャッチするかということです。同じ話を聞いて、同じ体験をしたとしても、そこから何をキャッチするかは人により千差万別だからです。キャッチするものの中身をどう受け止めるかで、その人の人生を決めるといえるのではないでしょうか。

投げたものしか返ってこないということは、プラスのことをすればプラスで返ってくるということです。逆に、マイナスのことをすればマイナスで返ってくるということです。

人の話を一語一句聞き漏らすまいと思いながら聴くことができれば、キャッチする中身も変わってくると思います。

②　凧

誰もが経験したことのある凧上げですが、凧は風を受けながら、空高く上がっていきます。こんな詩があります。

「凧」

凧が空高く飛べるのは
誰かが糸を引っ張っているから
でも凧は
その糸さえなければ
もっと自由に
空を飛べると思っている
その糸がなければ
地上に
落ちてしまうのも
知らずに・・・

産経新聞「朝の詩」より

この凧を自分に例えて考えてみてください。「自由に空を飛ぶ」とは、「自由に生きていく」と同意語だと思う人もいるかもしれません。ここでいう自由とは「自分の思うとおりに」とか「誰からも制約を受けない」ということでしょうか。この詩にもあるように、誰かが糸を引っ張っているから高く飛べるということに気づいてほしいと思います。

学校にはルールがあります。社会に出てもルールがたくさんあります。そのルールがあるおかげでみんなの生活は守られています。邪魔なもの、制約を排除することが自由だと勘違いしている人は、苦しくなるばかりです。「これさえなければ・・・」ではなく「これがあるからこそ」と受け止めることができるようになれば、邪魔だと思っていたものが邪魔だと思わなくなったり、制約を受けていたものを制約だと思わなくなると思います。「自由」の基本は「人に迷惑をかけない」ことだと思います。

③　微差は大差

一日一日は、ほんのちょっとかもしれませんが、コツコツと積み重ねていくことができると、やがてそれは大きな差になっていくと思います。

１．０１の法則をご存じですか？今の自分が１だとします。昨日の自分よりほんのちょっと頑張って０．０１の上乗せをします。次の日も次の日もちょっとだけ頑張っていきます。１．０１×１．０１×１．０１と１年間経つと１．０１の３６５乗になり、結果は３７．８倍成長したことになります。しかし、ちょっと怠けて０．０１サボると０．９９になります。次の日も次の日もちょっとずつ怠けて

いきます。０．９９×０．９９×０．９９と１年間経つと０．０３の成長になってしまいます。１年経ったのにほぼ成長していないに等しいということになります。３７．８は０．０３の約１２６０倍になります。昨日よりも今日、今日よりも明日というように積み重ねは大事です。

④ 小事が大事を生む

これは、イチロー選手がメジャーリーグでシーズン二六二安打の新記録を作ったときに記者の質問に答えた言葉です。記者から、「どうしたら、大記録を作ることができるのですか？」と聞かれ、「記録を目標にしていたわけではありません。毎日、毎日、今やらなければならないことを積み重ねた結果が二六二本という数字になっただけです」と答えています。まさに小事が大事を生む、だと思います。

それから、結果につながるかどうかも大事な要素だと思います。スポーツライターの田尻賢誉さんのメルマガに掲載された、三田紀房著「ここ一番に強くなれ！」に次のように書かれてあります。

努力という言葉を語るのが許されるのは、
勝者だけだ。
努力そのものに価値はない。
価値とは、
努力の先に掴んだ「結果」だけにある。
これを忘れて努力そのものに価値を見出すと、
大変なことになる。
あなたはこんなセリフを口にしたことはないだろうか？
「こんなに努力したのに評価されないなんておかしい」
「せっかくの努力が認めてもらえなかった。あの人は間違っている」
「結果だけを見て判断するなんて理不尽だ。俺だって必死にやったんだ」
もし心当たりがあるなら、
今後二度と口にすべきではない。
これらはすべて敗者のセリフである。

⑤ 伸びる選手

まずは、素直かどうかが重要だと思います。聞く姿勢ができていなければ、たとえ耳で聞いたとしても、心のシャッターを降ろしていては絶対に伸びません。なんとなく聞いていて、音が耳に届いているだけだと思います。そんな選手に、指導者の考えや思いが伝わるはずがありません。

伸びる選手は、「耳」で聞いて、「頭」で訊いて、「心」で聴いています。

⑥ 成功の方程式

稲盛和夫さんの言う「成功の方程式」です。それは、

「人生・仕事の結果 ＝ 考え方 × 熱意 × 能力」

で表すことができます。ここでいう「能力」には頭の良さだけではなく体の丈夫さやスタミナも含んでいます。これにあてはまる数値は０から100です。「熱意」も同様に０から100の数値が当てはまります。「考え方」だけは、マイナス100から100までの数値が当てはまります。たとえ頭が良くて100だとしてもやり抜く熱意がなく０だとすると、結果は０になります。たとえ頭が100で熱意が100でも、考え

方がネガティブでマイナス思考だと結果はマイナスになってしまうということです。

⑦　何とどう向き合うか

これは私の感覚ですが、これまでの十年とこれからの十年は、スピード感が違うと思います。ありとあらゆる、溢れ出た情報の中で、何を選択し、どう深めていくかというのは、現代人が忘れがちな部分ではないでしょうか。

例えば、スマホの無い時代は、いろいろな方法で調べ、ああでもない、こうでもないと考えるうちに深まりを増し、奥深く浸透していく感覚がありました。ところが今では、スマホ一つで結論が出てしまいます。そこに深まりはないので、頭に残らなくなってきています。確かに携帯電話は便利です。携帯電話一辺倒になり、頼り切ってしまうと依存症やトラブルに巻き込まれてしまいます。これからは、その使い分けができるようにし、昭和の時代のアナログな部分と、今現在のデジタルの部分の活用が大切になってくると思います。

⑧　これから求められる力

世の中、日進月歩で想像を超えるスピードで変化していっています。ほとんどの人がスマホを持ち歩き、必要な情報はすぐに手に入れることができるようになっています。そんな中、これから求められる力は、「解決力」と「創造力」です。

どちらにも言えることですが、必要なことは「考える力」を身につけることです。どこに問題があるのか。どこをどうすればどうなるのか。イメージする力とも言えます。日頃から、順序立ててイメージできることが大事だと思います。

⑨　人は「変われる」

「CHANGE（変化）」が「CHANCE（機会）」を呼びこんできます。「G」を「C」に変える努力が必要なんです。「G」と「C」の違いは鈎である「T」。「T」は「Trouble」の「T」であり、「CHANGE（変化）」を恐れて「Trouble（問題）」を避けると「CHANCE（機会）」は訪れないということです。

四　チームづくり

①　TEAM

TEAMとは、一説によると「Together Everyone Achievement More」の頭文字を取ってチームというのだそうです。訳すと「みんなで、一緒に、より多くの成果を得ましょう」ということです。

私は選手たちにこんな話をします。「甲子園という扉は大きくて重厚な扉である。しかし、みんなで力を合わせて押せば、開けることのできる扉でもある。この扉をみんなで開けて見せよう。しかし、この中にたった一人でも、無理だとか、ヤラかしただとか、諦めただとか、マイナス要因を作る者がいれば、鍵をするのと同じ行為である。鍵がかかると、どんな力を加えても押し開くことはできない」。

チーム一丸となって戦うことは勝つために大事ですが、チーム一丸というのが、なかなか難しいというのが現実です。私は、だからこそチーム作りは楽しいと考えています。ピンチはチャンスと物事を捉えるようにしています。

監督とはバランス感覚が必要だと思います。「枝葉を見て、木を見て、森を見ず」でもダメだし、「森を見て、木を見ず、枝葉に気づかず」でもダメです。全体を俯瞰しながら細かいところに気づく感覚が求められると思います。

② 牽引する者に求められる目

経営者にせよ、監督にせよ、チームを牽引する者に求められる目とは、まずは「鳥の目」です。鳥というくらいですから高い空から自分のチームを見て、どのポジションにいるのか俯瞰することを意味します。物事の全体を捉え、何が必要なのか、何ができるのか、いつできるのか、総合的に見て判断することを指します。

次に、「虫の目」です。虫ということは小さいということです。細かい数字を読んだり、チェックをしたり、目の前の仕事に集中するということです。細かいところまで徹底してやり遂げることを指します。

三つめは「魚の目」です。魚は水の中にいます。川の流れ潮の流れの中で生きています。流れは時間です。今の時代に合っているのか合っていないのかを見る目です。魚は側線という、深さや流れの速さを感知する感覚機能を備えています。「魚の目」を持つことは、時代の流れの中でチームの進むべき道を舵取ることを指します。

③ 不易流行

今の時代、監督が持ち合わせていないといけない感覚があります。それは、チームにはチームの、高校野球には高校野球の、野球には野球の、スポーツにはスポーツの、これからも守り続けていかないといけないことは、守り続けないといけないという感覚です。

また、新しいことは積極的に取り入れる感覚も絶対に必要だと思います。一度成功してしまうと固執しがちです。同じ練習をすれば勝てると思ってしまいます。選手が変わったり、対戦相手が変わったりすれば当然練習の内容も変わるはずです。

④ 貞観政要

致知出版社から出版されている渡部昇一さんと谷沢永一さんの「貞観政要～上に立つ者の心得～」の本の帯には次のように書かれてあります。「貞観政要」を読まなかった、織田信長や豊臣秀吉の政権は短命に終わり、「貞観政要」を読んだ、徳川家康や北条政子の政権は反映を築いた・・・と。

この本に出会えたことはとてもラッキーでした。トップに立つ者と右腕になる者の関係性が書かれてあります。国のためにならないと判断したなら、遠慮なく苦言を呈する右腕の存在は大事です。また、それを聞き入れるトップの器の大きさも大事だということです。トップを裸の王様にするかしないかは、この関係性が大事だと思います。

⑤ 求心性と遠心性

指導者としてどう在るべきかを常に考え、自分自身を深く深く掘り下げていくことが大事だと思います。この掘り下げて自己を磨くことこそが求心性だと言えます。

その求心性によって身についた心境や、その人が得た感覚を、会社でいえば幹部や部下、チームでいえばスタッフや選手などに伝え、上へ上へと引き上げていくことが遠心性だと言えます。しかし、遠心性を発揮すればするほど抵抗する人や足を引っ張る人が出てくるものです。そこで諦めてしまうとチームの力強さや迫力は失われてしまいます。

監督がやろうとする方向に選手を向かわせることができるのが真の指導者と言えると思います。求心性と遠心性を併せ持った指導者が率いるチームこそが強くなると思います。

⑥ サラリーマン

サラリーマンは会社に行くだけの人のことを言います。ビジネスマンは会社に結果を残しに行く人のことを言います。ただ会社に

行って、定時になればすぐに帰る。給料さえもらえればという安易な考えで、事なかれ主義の人がサラリーマンです。ビジネスマンは、相手のことを考え、やりがいや生きがいを感じながら会社の利益に貢献する人のことを言います。

このことは、選手にも、指導者にも言えることです。指導者は選手たちの人生に関わるわけですから、真摯に向き合い全身全霊で指導できるかどうかだと思います。選手だと、やる気がなくただ言われた練習だけをこなし、努力とは無縁の選手です。

⑦ 叱るコツ

叱るコツは三つあります。一つ目はその場でその瞬間に叱ることです。後で注意しておこうでは、最高のタイミングを逃してしまいます。二つ目は、直す方法をきちんと教えることです。三つ目は、その結果、できたのかできなかったのかを視てあげて、はっきりと伝えてあげることだと思います。ダメな指導者は、一つ目だけで終わっていることがほとんどだと思います。それだと、選手は怒られないようにしようとしてしまいます。選手にワクワク感を持たせられない指導者は、自己満足の勝てない指導者と言えると思います。

⑧ 啐啄同機

辞書やネットでは「啐啄同時」の方が多いと思います。しかし、私は「啐啄同機」の方をよく使います。なぜなら、同時だと、その時です。同機だとその瞬間です。差がそんなにあるわけではありませんが、よりタイミングの良い方をと思い、同機の方を使っています。

この「啐啄同機」の意味ですが、卵の中の雛鳥が、外に出ようと内側から殻を嘴で突つこうとする瞬間に、それを見ていた親鳥が、外側から殻を突ついてあげて殻を破るということです。選手が悩んだり壁にぶつかったときに、指導者はついつい教えたがります。その状況を見守ってあげて、選手が手を上げた瞬間が最高のタイミングです。その時に、適切なアドバイスを送ることが大事です。

⑨ キョウイク

「キョウイク」にはいろいろあります。普通に使う「教育」があります。それから「共育」があります。選手と一緒に成長するということです。それから「鏡育」があります。指導者の姿を選手が真似するということです。「響育」があります。選手の魂を揺さぶることです。「協育」は、みんなで力を合わせて成長していくということです。「競育」はみんなで競い合いながら成長していくことです。「強育」は強く逞しく成長するということです。それから、こんな「キョウイク」になってしまわないように気をつけなければなりません。それは「凶育」「恐育」「狂育」「怯育」です。こういう指導になってしまうと、選手をダメにしてしまいます。

もし何かあったら、「今日、行く」も大事なことです。休んだり怪我をしたり、学校や練習に行きたがらない状況になったときには、まずは「今日、行く」ことが大事です。

⑩ ダメにする言葉

負けたとき、失敗したときについつい指導者や親が言ってしまいがちな言葉です。それは「精一杯やったんだからいいじゃない」です。この言葉は、選手や子どもが失敗から学ぶ絶好のチャンスを奪っているということです。負けた悔しさは当事者である選手や子どもが一番分かっています。悔しさが自分の心の中で沸々と湧き上がってきて、次の頑張りにつながるエネルギーに変換しようとしているときに、この言葉を言ってしまうと、薄っぺらいものになってしまいます。選手や子どもの方から、大丈夫というニュアンスの言葉が

聞けたときに、悔しさをバネにできる内容の話が聞けたときに労いの言葉をかけてあげると良いと思います。

五　最後に

①　道を究める

何か一つを究めることはなかなか難しいことだと思います。だからこそ、目指しがいもあると思います。道を究めた人たちは、共通して自分を貫いた人たちだと言うことです。日本一の富士山でも、登山道は無数にあります。しかし、頂上は一つです。どの道を選ぶかは登山者が決めることです。決めたからには腹を括り走破することが大事です。絶望の淵に立たされたとしても、そこに見えるほんのわずかな光を見つけ、それに向かってなり振り構わず突き進む精神力が大事だと思います。

②　Simple is best

「Simple is Best」というこの言葉は、簡単に使える言葉ではないと思っています。重みのある深みのある言葉であり、道を究めた人がようやく辿り着けた境地だと思います。ああでもない、こうでもないと、あれもやってこれもやって考えられるすべてのことをやり尽くした人が、ようやく使える言葉だと思います。経験の浅い人が、実際にやりもしないで、あれも無駄、これも無駄と省いて排除して辿り着いたものとは全然違います。

③　明日やろうは「バカ野郎」

「明日という日は永遠に来ない」という話があります。明日やろうと思って、今やらなければ、永遠にやれません。明日を追いかけてもいつも私たちは今日を生きています。

俗説ですが、「翌檜（あすなろ）」という木があります。翌檜は檜（ひのき）に似ているけど、檜ではありません。翌檜は明日には檜になろうと頑張っているからということで、翌檜という字になったそうです。明日という日は永遠に来ないから、翌檜は永遠に檜にはなれません。

④　継続は力なり

先日、Voicyというアプリを利用していたら、こんな話を聞きました。ある経営者がこんな話をしてくれたそうです。

継続は力なり、
更なる継続は宝、
更なる継続は時代、
更なる継続は歴史になる

会社の経営者ですから、いろんな経験を積まれてきたと思います。もちろん否定や批判をするつもりは全くありません。私が考える継続とは、変化のある継続でなければいけないと思います。ただ同じことの繰り返しだけだとマンネリ化し新鮮味に欠けてしまうと思います。常にお客さんの笑顔や、選手たちの喜ぶ顔を想像しながら、工夫をしながら継続していくという感覚が必要だと思います。日清食品のカップ麺や、ロングセラーの商品は、事あるごとにバージョンアップしているとテレビで拝見したことがあります。売れている商品には必ず理由があり、更なる高みを目指しながら企業努力をしているはずです。

よく選手たちに「シンカ」の話をします。「シンカ」には、「進化」があり、常に前に進む推進力が必要であると思います。そして「深化」です。これでもかこれでもかと深く掘り下げていくことも大事

だと思います。それから「新化」です。先に進み、深く掘り下げると新しい物に生まれ変わることもあると思います。そうすると、その商品の「真価」が問われると思います。

⑤　成長

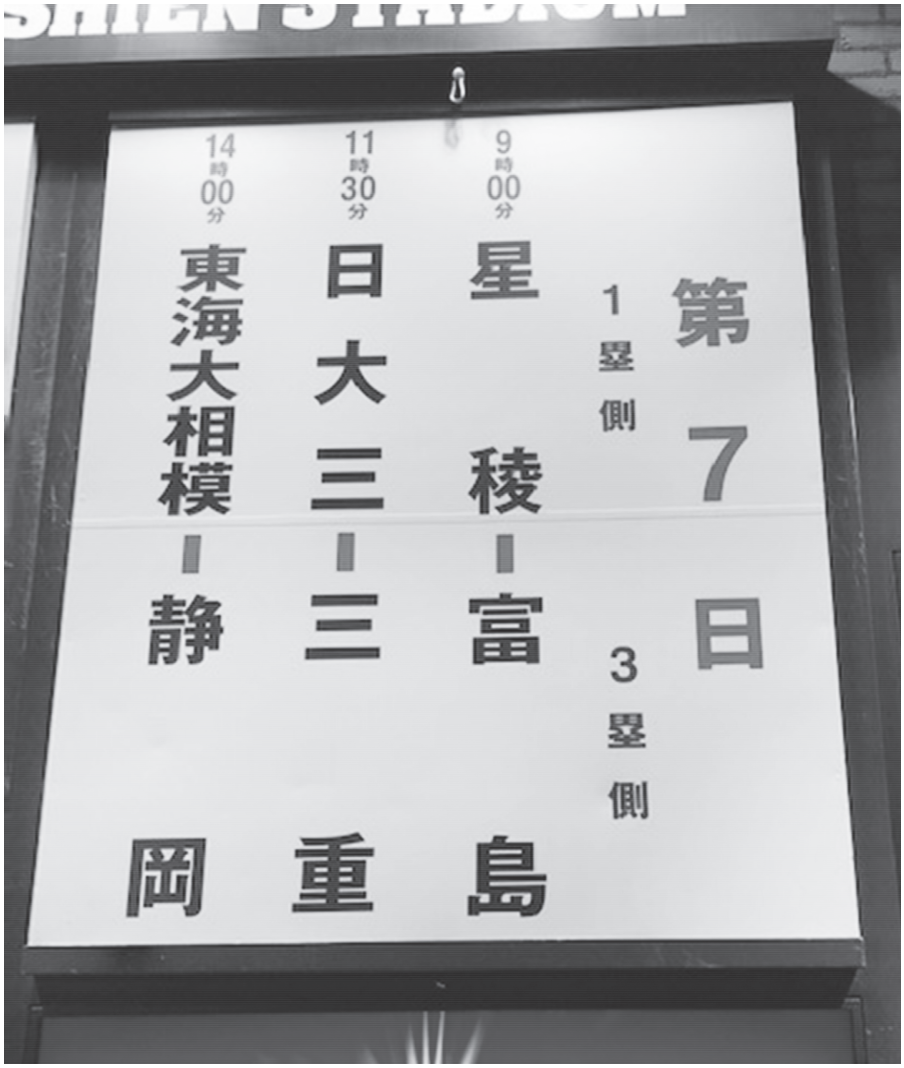
たゆまぬ努力の結果が、成長につながると思います。しかし、実際に成長したかどうかは、後から分かることであって、頑張っている人は成長を意識しながらやっていないはずです。

大事なことは、自分自身が動くことです。人の苦労話をいくら聞いても成長はしません。壁にぶち当たり、いろいろと言い訳を考えても、逃げようとしたって、塞ぎ込んでも答えは出ません。苦しければ苦しいときほど必死になれば、必ず光が差し込んでくるはずです。活路を見いだすことができるのは自分だけです。

汗水という水をやり、
何クソという肥料をやると、
根性という根が張り、
やる気という木が成長して、
やがて充実という実がなる。

（画像：著者提供　一部加工）

（画像：著者提供　一部加工）



（画像：著者提供）

宮崎県文化講座研究紀要　第四十八輯

令和四年三月三十一日　発行

編集
刊行　宮崎県立図書館
〒八八〇―〇〇三二
宮崎市船塚三丁目二一〇番地一
電話〇九八五―二九―二九一一

印刷　㈱ヒダカ印刷
〒八八〇―〇八六二
宮崎市潮見町一三番地五
電話〇九八五―二八―四一一三

（非売品）

No.

©２０２２　宮崎県立図書館